

アートとケア

アール・ブリュットから受けるもの

2

アール・ブリュットとは、
美術教育を受けていない人々が創造する「生」の芸術。
心身に障害を持つ作家も少なくない。
あるがままの作家の内なる世界とのやりとりを迫る作品は、
私たちに何をもたらすだろうか。



「折り葉の動物たち」

(2003-2017年、技法：葉、[H]18-65mm×[L]12-75mm×[D]13-91mm)

撮影：高石巧

アール・ブリュットの持つ力

こどもの国協会理事長／元・駐スウェーデン特命全権大使
渡邊芳樹

生の芸術アール・ブリュットと私の出会いは2012年に遡る。その後、国内外でアール・ブリュットの発信を続ける介護・福祉関係者を通じて理解を深め、欧州5か国を旅して専門家や作品にも出会った。最近では欧州だけでなくアジアでも、日本のアール・ブリュットの高い評価は確立している。

また、国内的には2018年に、世界にも例のない障害者文化芸術活動推進法が制定され、「専門的な教育に基づかずに人々が本来有する創造性が発揮された作品が高い評価を受け、その中心が障害者の作品であること等を踏まえ、障害者による芸術上価値が高い作品等の創造への支援を強化すること」が明記された。

日本のアール・ブリュットは知的障害者等の日常生活から多く見いだされる。欧州ではかつての隔離型精神病院の臨床現場で看護職が作品の価値に気が付き密かに保管してきた作品も多い。

心身の障害の軽減を目指すことも重要だが、当事者が本来持つ優れた創造性を高く評価しリスペクトとエンパワーメントに繋げることは極めて重要である。アール・ブリュットはノーマライゼーションを超えた新たな価値を提示している。

今月の作家

渡邊義紘 Yoshihiro Watanabe

1989年生まれ／熊本県在住

「折り葉」と名付けられたこの作品は、世界広しといえど、その発想と創造において類を見ない。渡邊は、毎年11月頃にクヌギの木より落ちる葉を待ち、その葉でさまざまな動物を折りだしていく。誰に教わることなく、頭の中に確かな設計図があるのか、迷うことなく作っていく。渡邊の創作は10歳頃より始まり、「折り葉」作品以外にもハサミによる切り絵などの創作も行っている。（解説：小林瑞恵）